

子供の時分の話

小川未明

青空文庫

あめ売りの吹く、チャルメラの声を聞くと、子供の時分のことを思い、按摩の笛の音を聞くと、その人は涙ぐみました。その話を聞かせた人は旅の人です。そして、その不思議な話というのはつぎのような物語です。

* * * * *

町からすこしばかり離れた、小さなさびしい村でありました。村には昔の城跡がありました。ちようと私と同じい七つ、八つばかりの子供が、毎日五、六人も寄り集まって鬼事をしたり、こまをまわしたりして遊んでいました。

ずっと以前から、この村に一人のあめ売りじいさんが入ってきて

ました。チャルメラを吹いて、小さな屋台をかついで町の方からやってきました。子供らはみんな、このおじいさんの顔をよく知っていました。

私は、昼寝をしている時分に、夢の中でこのチャルメラの声を聞いたこともあります。また外に遊んでいる時分に、かなたの往來にあたって聞いたこともあります。

木の葉が風に光つていたり、とんぼが飛んでいるのを見るよりほかに、変化のない景色は物憂く、単調でありましたから、たまたまあめ売りの笛の音を聞くと、楽しいものでも見つかったように、その方へ駆けていったものです。

このあめ売りじいさんは、城跡の入り口のところに、いつも

屋台やたいを下ろおしました。そして、村むらじゆうの子供こどもを呼び寄よせるように、遠方えんぽうを望のぞんで、チャルメラを吹ふき鳴ならしました。じいさんは、もういい年としであつたとみえて、目めのしよぼしよぼとした小こじわのたくさんな顔かおが日ひに焼やけて、黒くろい色いろをしていました。

けれど、私わたしは、またこんな無愛想ぶあいそうなじいさんを見みたことがありません。多おほくの子供こどもが、こうしてなつかしそうに、慕したわしそうにそのそばへ寄よつてきましても、つい一度どとして笑わらった顔かおも見みせなければ、戯談じょうだんをいって喜よろこばせてくれたこともなかつたのです。

こうして、そこに二、三十分ふんも屋台やたいを下ろおして休やすんでいます。もうあめを買かつてくれる子供こどもがいよいよないとわかると、じいさ

んは黙だまって屋台やたいをかついで、お城しろの中なかを通とおって、かなたの村むらの方ほうへといつてしまいます。私わたしは、いつもさびしそうにして、おじいさんの消きえてゆく姿すがたを見送みおくりました。

昔むかしからある、城しろの門もんの四角かくな大おおきい礎石そせきは、日ひの光ひかりを浴あびて白しろく乾かわいていました。草くさは土手どての上うえにしげっていました。そして、小鳥ことりは四辺あたりの木々きぎのこずえに止とまってないました。北きたの方ほうから、悲かなしい風かぜが吹ふいてきて、ほおをなでたのであります。

「さあ、家うちの方ほうへ帰かえろうよ。」と、友だちの一人ひとりがいいますと、「ああ、帰かえろう。」と、みんながいつて、家うちのある方ほうへと帰かえっていききました。

「君きみ、河かわへ泳およぎにいこうか。」と、中なかの一人ひとりがいいますと、

「ああ、泳ぎおよにいこう。」と、あるものは同意どういしましたけれども、
また、あるものは、

「僕ぼく、河かわへいくとお母かあさんにしかられるから、いやだ。」と、ゆ
くのを拒こぼんだものもあります。

「弱虫よわむしだなあ、じゃ、僕ぼくらだけ泳およぎにいこうよ。弱虫よわむしなんか
こなくともいいや。」と、二、三人にんが、一つになつて途とちゆう中ちゆうから

別わかれて、田舎道いなかみちを歩あるいて河かわのある方ほうへといつたのであります。

私わたしは、いつもその弱虫よわむしの中なかに入はいっていました。私の祖母わたしそぼや母は
親はおやが、河かわへいくことを危あぶないといつてきびしくしかつたからで
す。そして、私わたしはいつも弱虫よわむしの仲間なかまに入はいつて、家うちの方ほうへと帰かえつ
ていきました。

そればかりではありません。私の祖母や、母親は、私を家の前からかけつして遠くへはやらなかつたのであります。

「一人で、遠くへゆくと、人さらいがきて連れて行ってしまいうから、家の前から遠くへいつてはいけない。」と、つねにいいきかされていたのであります。

だから、遊ぶ友だちのいない、ただ自分一人のときは、ぼんやりとして、日の当たる路の上に立つていました。そして、だれかいつしよに遊ぶ友だちが出てこないものかと待つていました。

ある日のことです。私は、やはりこうして一人さびしく往來の上に立つていました。けれど、犬一匹きその姿を見せなかつたのです。ただ路の上には、なにか小さな石が日に照らされて光つ

ていました。そして、とんぼが、かなたの圃はたけの上うえを飛とんでいるの
が見みえたばかりです。

私わたしは、退たい屈くつでしようがなかつたのです。このとき、遠とおくでチ
ヤルメラの音おとが聞きこえました。私わたしは、飛とびたつように勇ゆう氣きづけら
れました。いくらそのおじいさんが無ぶ愛あい想そうでも、ずつと昔むかしから
この村むらにくるので、まったくの顔かおなじみであつたから、けつして
他人たにんのような氣持きもちがしなかつた。そのそばへいつて、屋台やたいにさ
してあるいろいろな色いろ紙がみで造つくられた小旗こぼたの風かぜになびくのを見みた
り、チヤルメラの音おとを聞きこうと思おもいました。また、きつとよそか
らも、友ともだちがそこへ集あつまつてくるにちがいないと思おもつたので、
私わたしは、さつそく駆かけだしました。

城跡しろあとのところに行きますと、いつもおじいさんが屋台やたいを下ろす場所ばしょに屋台やたいが置いてあります。そこからチャルメラの声こえが聞こえてきました。そして、今日きょうはいつもより、紫むらさき色の紙かみの小旗ぼたがたくさんにちらちらと見えみましたので、早くはや変わった光景こうけいをながめたいと走はしって行きました。

すると、それは、いつものおじいさんじゃありませんでした。私わたしは、このはじめて見るおじいさんを不思議ふしぎに思おもいました。おじいさんは、こつちを向むいて、にっこり笑わらっていました。そして、私わたしがだんだん不思議ふしぎに思おもいながら近ちかづくとき手招てまねぎをしました。そのおじいさんの顔かおは、白しろくて目めが光ひかっていました。私わたしは、このおじいさんが、いつものおじいさんと異ちがって、愛あい嬌きようがあるのに

もかかわらず、なんとなく気味悪く思いました。

「さあ、おいでよ、おいでよ。」と、おじいさんはいいました。

私は、自分一人だけで、ほかに友だちがなかつたから、あまり屋台には近寄らずに、離れてぼんやりと立っていますと、

「ここまでくると、おもしろいからくりを見せてやる。さあさあ早くおいで、一人のうちはお錢をとらない。さあさあ、早くおい

で。」と、おじいさんはいいました。

私は、からくりを見たさに、だんだんと近寄っていききました。

「さあ、その孔からのぞき。第一は姉と弟とが、母親をたずねて旅立つところ。さあさあのぞき。一人のうちはお錢を取らない

。」

わたしは、わたし 屋台やたいにかかつている箱はこの孔あなをのぞいてみました。すると、
旅姿たびすがたをした姉あねと、弟おとうとの二人ふたりが目めに映うつつたのであります。

「つぎは、途中とちゆうで、二人ふたりが悪者わるものに出であうところ。」
と、おじいさんがいって糸いとを引ひきますと、青あおい、青あおい、海原うなばらが
見みえて、怖おそろしい姿すがたをした悪者わるものが、松まつの木の蔭かげに隠かくれて、かな
たから歩あるいてくる二人ふたりのようすをうかがっていました。

これから、どうなることだろうと思おもっているうちに、おじいさ
んは孔あなの中なかを真まつ暗くらにしてしまいました。

「さあ、これから二人ふたりが、人買ひとかい船ぶねに乗のせられて沖おきの島しまへやられ
るところ、もつと先さきまでいくと見みせますよ。さあ、いつしよにお
いでなさい。」と、おじいさんは屋台やたいをかついで、お城しろの中なかへ入はい

つていきました。

わたしは、悪者わるものが、姉あねと弟おとうとをどんなめにあわせるだろうと思おもうと、かわいそうになつて、ついそれが見みたくて、あめ売うりの後あとについていきました。あたりはまつたく圃はたけで、人ひと一人ひとり通とおらなかつたのであります。

不意ふいに、おじいさんは屋台やたいを下おろすと、私わたしを捕とらえました。私わたしはびっくりして声こえをたてる暇ひまもなく、おじいさんは私わたしの口くちに手てぬぐいを当あて、ものはいえないようにして、

「いいところへ連つれていってやるから、おとなしくして、この箱はこの中なかに入はいっているのだ。」と、私わたしを箱はこの中なかへ入いれてしまいました。それをついでおじいさんは、とつとと途みちを歩あるいていきました。

狭い、身動きもできないような真つ暗の箱の中に押しこめられて、私はしかたなくじつとしていました。おじいさんは、どこを通っているのかわかりませんでした。その後はチャルメラも吹かずに、さつさと歩いていました。

「あんまり、一人で遠くへゆくと、人さらいに連れられていつてしまう。」といった、祖母や母親の言葉が思い出されて、私は、しみじみ悲しくなつて泣いていました。

おじいさんは、どこをどう歩いているのだから私にはわかりませんでした。だいぶん長い間歩いたと思う時分に、おじいさんは屋台を下ろしました。そして、箱の中から私を外に出しました。このときよく見ると、おじいさんの顔は、まったく気味が悪いほど

いろしろ色が白く、目が光っていました。私はいつも村にやってくる無愛想な、あめ売りじいさんを思い出して、どれほど、その人のほうがいいかshれないと思ひました。

「さあ、なんにも怖いことはない。私といつしよにくるのだ。」と、おじいさんは、屋台を木の下に置いたまま先に立つて歩きました。私は、そこがどこだか、ちつともわかりませんでした。さびしい山の間で、両方には松の木や、いろいろな雑木のしげった山が重なり合っていました。そして、ただ一筋の細い路が谷の間についていました。

おじいさんについて、どんなところへ連れていかれるのかと心配しながら歩いてゆくと、はや、せみの松林で鳴いている

声こえが聞きこえました。日ひが暮くれたら、どうなるのだらうと思おもうと、もう一ひと足あしも歩あるく気きになれなかつたけれど、路みちがわからないので逃にげ出だすこともできなかつたのであります。お母かあさんや、おばあさんが、私わたしをたずねて、心しん配ぱいしていなさるだらうと思おもうと、私わたしは胸むねがふさがるような気きがしました。

「さあ、この峠とうげを越こすと、もうじきだ。」と、おじいさんはいいました。

どんなところへゆくのだらうと、私わたしはそればかり思おもわれて、心し配ぱいでなりませんでした。

やがて峠とうげを越こすと、三けん、四けん軒けんの古ふるい粗そ末まつな家うちが建たっていました。おじいさんは、その一けん軒けんの家うちに私わたしを連つれて入はいりました。すると、

そこには肌ぬぎになつて、おおおとこ大男が四、五人で、花がるたをしていました。そして、おお大きな目をむいて、けんめいにかかるたをとつていました。

「こんな子供をつれてきた。」と、おじいさんは、みんなに向かつていいました。けれども、だれも相手にならず、かるたのほうに氣を取られて夢中になつていました。

「どれ、湯に入つてこよう。」と、おじいさんはいつて出てゆきました。

そこは沸かし湯の湯治場であつたのです。わたしひと私は独りすわつて、このものすごい室の内を見まわしてました。まだランプも、電燈もなく、ただ古ぼけた行燈が、すみのところに置いてあり

ました。わたしは心で、これはきつと悪者どもの巢窟であると考え

えました。そして、この間に逃げ出さなければならぬと思いまし

た。私は、よくそのときのことを覚えています。このとき、按摩

が笛を吹いて家の前を通りました。

私は決心をして、男どもに気づかれぬように、そつと室を出

て、下駄をはきました。そして、だれか見ていぬかと四辺を見ま

わしますと、勝手もとのところで、まだ若い女が、白い手ぬぐい

をかぶつて働いていました。私は、その女の人がなんとなくやさ

しい人に見えましたので、そのそばへいつて、

「小母さん、どうか私を家へ帰しておくれ。」と、泣いてたもと

にすがりました。すると、やさしそうなその女の人は、じつと私

の顔かおを見てみいましたが、

「知しれるとたいへんだから、早はやく私わたしにおぶさり、あのおじいさん
のいないまに逃にげなければならぬから。」と、女おんなの人はいつて、
白しろい手ぬぐいをとつて、その手てぬぐいで、私わたしの顔かおをわからないよ
うに隠かくしました。私わたしは、目めをふさがれて、女おんなの肩かたにつかまり、そ
の脊せにおぶさりますと、女おんなはすぐにそこから音おとのしないように歩ある
き出だして、きたときの峠とうげを下くだりました。

やがて女おんなは二、三丁ちようもくると、息いきをせいて、私わたしを下おろして休やす
ました。けれど、まだ私わたしの目めから手てぬぐいはずしませんでした。
「わたしは、みんなに知しれるとひどいめにあいますから、ここか
ら帰かえりますよ。坊ぼっちゃんは、いまあつちからくる馬うま方かたに頼たのんで

あげます。」と、女おんなはいつて、ガラガラと馬うまに車くるまを引ひかせてきた馬方うまかたに、なにやら小声こごえで女おんなはいつていました。

「また、達者たっしやだつたら坊ぼつちやんにあいますよ。けれど、だれかがとつてくれるまで、独ひとりで手てぬぐいをとつてはいけませんよ。」と、女おんなはいつてました。私わたしは、黙だまつてうなずきました。そしてなんとなく、このやさしい女おんなに別わかれるのが悲かなしゆうございました。

私わたしは車くるまの上うへに乗のせられて、長ながい間あいだ、知しらぬ街道かいどうをガラガラと引ひかれていつたのであります。どんなところを通とおつたか、どんな景色けしきであつたか、目めを隠かくされているので、すこしもわからなかつたのです。そして、あるところに来きたときに、

「ここだ。」といつて、馬方うまかたは車くるまを止とめ、

「さあ下りた。そして、すこしここに立って待っているのだ。」
 といつて、私を抱き下ろしてくれました。

私は、いわれるままに立っていました。そのうちに馬方は、
 馬を引いていつてしまいました。ガラガラと車の音は、しばらく
 遠くなるまで私の耳に聞こえていました。

いつまで待っても、いつまで待っても、だれもきてくれなかつ
 たのです。私は、ついに悲しくなつて泣き出しました。大きな声
 をあげて泣き出しました。すると、だれかきて、私の目かくしを
 取ってくれました。

見ると、それは私のおとうさんで、私は村はずれの大きな並木
 のかげに立っていました。

日は、もうとつくに暮れていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年7月

※表題は底本では、「子供《こども》の時分《じぶん》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供の時分の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>